
君の青色

イナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

君の青色

【Nコード】

N9655E

【作者名】

イナ

【あらすじ】

私は君のことが知りたい。どうして泣きたくなるほど暖かい写真が撮れるのか。どうしてそんなに悲しそうな目をしているのか……

第1話 夕焼けと、不機嫌なきみ

私、原田真純はひたすら歩いていた。

できるだけ何も考えず、頭をからっぽにして。そうすれば、今にもこぼれ落ちそうな涙が引っこんでくれる気がしたから。

放課後の学校はひと気がなく、廊下を踏みしめる上履きの音が周りに響いている。

ふと、目の前の景色が変わったことに気づく。うつむきがちになっていた視線を上げると、オレンジ色の風景がそこにあった。

それは、一枚の写真。

パネルからあふれそうなほどの、まぶしい夕焼けの写真だった。

その夕焼けをバックに、小さい女の子の姿も映っている。スキップをしているような、遊びながら歩いているところが想像できそうな後姿だった。

私は、もう頭をからっぽにしておくことなんてできなかった。夕焼けがいつぱんに心の中に流れ込んできて、止めることができない。それほど胸にしみる色が、その写真にはあった。

涙をこらえようとする努力も、やめてしまった。そんなことをするより、ただ、この色を感じていたいと思ったから。

少し泣いたあと、私は写真パネルの下に「中学生写真コンクール銀賞受賞」と書かれているのを見つけた。

この作品、私と同じ中学生が撮ったんだ。すごい、信じられない。私は写真を撮った人物の名前を、心に刻みつけた。暖かな夕焼けの風景とともに。

その人の名前は、谷崎蒼、と言った。

それから少しだけ時間が過ぎ、私は二年生になった。

始業式を終えたあと、教室の廊下にクラス割りが貼り出された。

自分の名前を探す生徒たちでこつたがえしている。

私ももちろん、自分の名前を探しているけれど……こういう時、背が低いと損だなあとあらためて実感する。

「真純、何してんの？ 垂直飛びの練習？」

笑みを含んだような声が聞こえてきた。一年で同じクラスだったリオだ。

「そうそう、今度の体力測定ではクラスで一番を目指して……ってなんでですか」

とりあえず、一度ノツてからツツコンでみる。リオはますます笑って白い歯を見せながら、

「ほら、3組だよ。ちょうど真ん中のところ。今年も同じクラスだね」と指さしてくれた。

「あ、ありがと。ホントだ、同じクラス！ 今年もよろしくお願いシマス」

「うん、こつちこそ。……それはいいけどさあ、あんまり上見てたり跳ねてたりしたら、また立ちくらみするよ」

ちよっぴりいかめしい顔でリオは私に注意をした。

そうだった。私は時々貧血を起こす。何度もリオの前でかつこ悪い姿をみせてしまっている。

私は、恥ずかしい気持ちと心配してくれて嬉しい気持ちがないまぜになったまま、リオに向かって笑いかけた。

「大丈夫だよ、リオ。ほら、さっきの始業式でも全然平気だったでしょ？」

それに、あの写真に元気をもらったし、と心の中でそつと付け加えた。

「うーん、まあね。本当に大丈夫ならいいけど……」

リオを心配顔にさせるのはこれで終わり。私は、他にも同じクラスで知ってる人がいるか探そうと提案した。

二人でクラス割の上から順に名前を見ていく。

と、見覚えのある名前がそこにはあった。

——谷崎蒼。

胸が、大きな音をたてた気がする。

あの人だ。あの夕焼けの写真を撮った人だ。

鳴り続ける心臓を抑えつつ、私は新しいクラスの席についた。落ち着きなくキョロキョロと周りを見回す私をリオが不思議そうに見ていたけれど、どうにも気になって仕方がない。

どの人が谷崎くんなんだろう……？

あれ？「蒼」っていう名前なら、女の子の可能性もあるのかな？ うーん、どっちにしても、気になるよ。

気がつくと、担任の先生が出席順に名前を読み上げていた。あ行人たちから、少し緊張したような返事が聞こえる。

次はか行、さ行……もう少し。もう少しすれば谷崎くん（さん）がわかる。

「えーと、次は……谷崎蒼」

とうとう一番聞きたかった名前を、先生が呼んだ。

返事を待つ。何で、自分の名前を呼ばれるより緊張するんだろう？しかし。

「谷崎ー。いないのかー？」

お休み？　そう言えば席が一つ空いてるけど……。

先生は、出席簿にペンで欠席のサインらしきものを書いている。

「初日つからしーがねえな」とか呟きながら。そのとき――

突然、教室の後ろ側の戸が乱暴に開けられた。

クラス中のみんなが一斉に音の出所を振り返る。私もびっくりした顔を隠せないまま振り向く。

立っていたのは男子生徒だった。

あまりものが入ってなさそうな鞆をだるそうに肩から提げている。それでも、長い前髪ごしに見える瞳は挑発的に見えた。

彼は、見られていることも気にしていない風で教壇のそばにやってきて、先生に軽く頭を下げた。

「遅れて、すみません」

「ああ、谷崎だな。今出席とってたところだったんだぞ。遅刻だけで出席、と。明日からは遅れるなよー」

「……はい」

やっぱり、この人が谷崎くんなんだ……！

私は、谷崎くんが座っている後ろのほうを思いっきり振り返りたいのをこらえて、大人しく先生の話を聞いているふりをしていた。

今日は始業式で授業はないのだけれど、先生方のありがたいお話をたくさん聞かせてくださるらしい。もちろん、生徒にとっては子守唄にピッタリなお話だけだね。

そんなわけで、生活指導の先生が話に来るまで、しばらく休み時間挟むことになった。

話しかけるなら、今だ。

谷崎くんは一人で廊下に出て、窓の外をぼんやり眺めている。

さっきの登場の仕方を見るに、ちよっぴり怖い人っぽい。そのせいか、最初の一步が踏み出せないでいた。

でも……えーい、考えないで行動行動！

私は弱気な自分が出てくるのを何とか押しとどめて、谷崎くんに声をかけた。

「あの……谷崎くん、だよね」

「……」

「私、同じクラスの原田真純っていうの。ちょっと聞きたいことがあって……いいかな？」

やっぱりと言うか何というか、返事はなかった。せっかく勇気を出したのだから、もうちよっと頑張ってみよう。

「あの、西校舎の廊下に飾ってある写真、谷崎くんが撮ったんだよね？ すっごいキレイだなんて、いつも……」

最後まで言うことはできなかった。

谷崎くんは、傍目でわかるくらいビクツと身をすくませ、それから、何か小声でつぶやいた。

「……せえ」

「え？」

「うるせえって言うてんだよ。どっか行けよ」

谷崎くんは吐き捨てるように言うと、背を向けて教室の中に入っ
ていつてしまった。

けして大きな声ではなかったけれど、切れ味は十分だ。胸のどこ
かに、さっきの言葉の破片が残っているような気がする。

よっぽど気にさわる言い方をしちゃったんだろうか。どうすれば
いいかわからず立ち尽くしている、なじみのある声が聞こえてき
た。

「真純、勇気あるね」

「今の谷崎くんでしょ」

リオと同じく、去年同じクラスだった女の子たちだ。

「ああ、谷崎の話？」

「ヤツはちよつと感じ悪いよねー」

周りにわらわらと女子の数が増えてきた。あれ、みんなどこから
現れたの？

「みんな、谷崎くんのこと知ってたの？」

「うん、有名だよー。写真で賞とって新聞にも載ったし、騒がれて
たしね」

新聞の記事なら、私も見ていた。思わず、「この写真撮った人、
同じ学年の人なんだよ！」と両親に自慢してしまったくらいだ。

思い出している間にも、谷崎くんへのコメントがどんどん増えて
いた。

「そのせいかね？ 天狗になってるっつーか」

「あたしなんか話しかけても無視されたよー」

「くやしいことに顔はいいんだ顔は」

みんなの話を聞いていると、どうやら谷崎くんはいつも冷たい態度らしい。それなら、私が特別怒らせるようなことをしたわけではないかもしれない。

けれど、次はどう話しかければいいのだろうか。谷崎くんの取りつく島もない態度を思い出し、私は小さくため息をついた。

第2話 もの思い

しばらく私が考え込んでいる間に、みんなの意見がまとまっていたらしい。

「だよー、だからさ」

クラスの子の一人がそんな風に言ったあと、みんなが申し合わせたように私のほうに振り返ってこう言った。

「だから、アイツ狙いはやめときなよ」

「ええっ？」

想像もつかないことを言われて、頭が真っ白になってしまった。

「ね、狙う？ って、そんなつもりじゃ……」

そもそも、まだろくに会話もできていないのに。

言葉にならない声を発しながらうろたえる私を見て、みんなは目を細めてニンマリと笑っていた。しまった、噂話のネタを提供してしまったかもしれない。

「おおっ、真純っちが激しく照れておりますっ」

「だから違っつてば」

結局、休み時間はみんなにからかわれて終わってしまった。

…… 本当に、狙うとかそんなのじゃないのに。

ただ、あの写真をどんな時にどんな気持ちで撮ったか、そういうことを聞いてみたかっただけなのに。

でも、谷崎くんのある態度じゃこれ以上聞けそうにないなあ。もしかすると、これまで散々写真のことを聞かれて、嫌になってしまっているのかもしれない。

だとすると、悪いことをしてしまった。

教室で先生の話が始まって、内容が全然頭の中に入ってこなかった。頭の中にあるのはただ、後悔ばかりだった。

「どうすればいいかなあ」

私は、座っているイスを落ち着かなげに回しながらつぶやいた。
今は放課後。私は保健室に来ていた。

と言っても病気や怪我のためではなく、ただ保健の先生とおしゃべりするため。

先生は私を追い出そうとはせず、話に乗ってくれる。

「なーに？　悩みなら言っちゃいなさいよ」

「うん……悩んでいうか、人と、話をする方法」

「話？」

イスの動きを止めて、私は再び話し出した。

「一度話しかけたんだけど、『うるせー』って言われて会話終了しちゃったんだ。もう一回挑戦したいんだけどな」

「なるほどね。そっか、その相手ってさ」

先生の口調が少し真面目になる。保健室の先生なら、生徒から相談を受けるのに慣れているのだろ。どんなアドバイスが来るかと待ち受けていると、

「その相手って、ズバリ男っ？」

……好奇心丸出しだった。

私はイスから転げ落ちそうになるのをこらえなければならなかった。

「う、うんまあ、男の子だけ……」

体勢を直しながら、なんとか答えた。クラスの子も先生もみんな、本当にこういう話好きなんだな……。

「あらっ、ホントに？　へええー青春だねえ、このこの！」

なぜか嬉しそうに、先生は私の肩をつついていて。しかしそのあとすぐにがっくりと頭を垂れた。

「男の子と会話をはずませる方法か……。そんなのあったらあたしが知りたいよ……ハハ」

どうやら、先生のデリケートな部分に触れてしまったらしい。

いわゆるコイバナ、というものに全く疎い私はどう答えていいのかかわからず、先生をフォローする言葉を頭の中で懸命に探していた。

「ま、まあ、それはいいとして……」

さっきの言葉をごまかすように、先生はおほんと咳払いをした。それから表情を改めて言った。

「その男の子、ちょっとムズカシイ子なのね」

「うーん、どうなんだろ。他の子たちも話しかけて無視されたって言ってた」

首をひねる私。もうこれ以上彼には近づかない方がいいのかな、と弱気が私を支配しつつある。

いつのまにか先生は席を立ち、マグカップを二つ持って戻ってきた。そのうちの一つを私に手渡ししてくれる。

カップの中身は温かい紅茶だった。いい香り。私は先生にお礼を言って、口をつけた。

私が紅茶を飲み始めるのを見てから、先生は言葉を続けた。

「そういう、ちょっとキツイ子ってさ、自分の弱いところを隠すためにトゲトゲしてるってこともあるわよね」

「弱い、ところ……」

紅茶の湯気に包まれながら、私は思いをめぐらせた。

あんなに素敵な写真を撮る谷崎くんにも、弱いところがあるのだから。いや、弱いところがあるからこそ、胸に迫るものを創れるのかもしれない。

「まあ、あれよね。月並みだけどさ、友達になりたいって気持ちを相手に伝えるのが一番よね」

先生は自分の言葉にうんうんと頷きながら、言葉をしめくくった。

第3話 きみに伝えたい

伝える、かあ……。

先生が飲み終わったカップを洗ってくれている間、私は物思いにふけていた。

うん、伝えたい。

素直に、写真をきれいだって思ったこと。

悲しい気持ちが吹き飛ぶくらい、あの夕焼けが胸の中に入り込んできたっていうこと。

それだけでも、伝えたい。

どうすればいいか分からなかった気持ちが、少しずつクリアになつていくのを感じた。

「先生、私、もう一度声かけてみる。あんまりしつこくしたらダメだけど、やっぱり、あきらめたくないから」

「うん、頑張れ」

先生は、もうおどけることはなく、静かに笑ってくれた。

「あ、でもね」

そのまま走りだしそうな勢いの私に、先生はいさめるように言った。

「頑張るのはいいけど、あんまり無理はしないこと。でないと、また保健室ベッドの常連になっちゃうわよ」

「……はい」

私は肩をすくめた。今日は注意されっぱなしだ。

でも、先生が心配してくれているのがよくわかる。リオだつてそうだ。もっともつと元気になろう、と心の中でこっそり誓った。とりあえずほうれん草を残さず食べるべきかな。

私はポケットに忍ばせている紙にそつと触れた。

その紙は、私の心の声に返事をしたかのように、カサリと鳴った。

始業式の翌日からは、早速授業が始まった。

谷崎くんは、昨日と同じく中身の少なそうな鞆で登校して、だるそうに席についている。

勇気を出してあいさつしてみたけれど、やっぱり無視されてしまった。これは前途多難だなあ……

お昼休み、谷崎くんの席を見るともういなくなっていた。どうやら一人でふらりと出て行ったらしい。

私はリオたちとお弁当を食べたあと、先生に呼ばれているから、というような理由をつけて、教室を出た。もちろん、谷崎くんを探すためだ。

みんなにウソをついてこそこそするのは嫌だったけど、本当のことを言つて、谷崎くんのストーカーみたいに思われないか不安だった。

まあ、文字通り谷崎くんをつけまわしている気はするんだけどね。少し自分自身に不安を覚えつつ、私は階段を登った。

ビンゴだ。

とりあえずやってきた屋上で谷崎くんの姿を見つけ、私は驚いた。谷崎くんの行きそうな所を考えてみて、いくつか上がった候補のうちの一つがこの屋上だった。雑然とした物置きがわりの踊り場を抜ける必要があるため、普段はあまり人がこないのだろう。一人きりになるには最適の場所に思えた。

なんて話しかけよう、昨日のこともあるしなあ、と必死であいさつの言葉を考えていたとき、谷崎くんが一人ではないことに気づいた。

あれは、生物の永野先生かな？ 谷崎くんと向かいあい、何か話している。今は声をかけるわけにはいかないな……と階段を降りか

けると、谷崎くんの鋭い声が耳に届いた。

「しつこいですよ。何度言われても、もう撮る気はありませんから」
えっ……？

とる気はない、というのは写真のことだろうか。私は足が凍りついたように、その場から動けなくなってしまった。谷崎くんの言葉を聞いて、永野先生は残念そうに溜息をついた。

「そうか……。じゃあ、せめて新入部員にカメラの扱い方を教えてやってくれないか？」

「もう、部活には出る気ないんで」

先生の提案にも谷崎くんは耳を貸さず、すっぱりと拒絶した。先生に背中を向けた谷崎くんは、もうどんな言葉も聞かないという風に自分を閉ざしている気がした。

永野先生はしばらく、谷崎くんの気持ちを感じ取ろうとしているように彼の背中を見つめていたけれど、やがて二度目の溜息をつく
と、

「うん、わかったよ。しつこく言ってごめんな。気が向いたら、部屋に来てくれ」

そう言って、谷崎くんの元を離れた。

何となく見つかってはいけない気がして、私はあわてて扉の裏に身を隠す。息をつめて待っていると、先生の階段を降りる足音が遠ざかっていった。

どうしよう。

どうしようと言っても私が何か関係しているわけでもなかったのだけれど、さっきの話が気になって仕方がない。

——もう写真を撮る気はない。

谷崎くんはそう言っていた。

第4話 きみと屋上で

今、屋上にいるのは谷崎くんと私だけだった。

私は谷崎くんの動かない背中を見つめ、このまま私も立ち去るべきだろうか、と迷っていた。

写真を撮らないって本当？

そう聞きたかったけれど、部外者の私が急にそんなことを言っても興味本位だと思われるってしまうだろう。

考えが堂々めぐりをしている最中、無意識にポケットに手をのばしていたらしい。指先に触れるものを感じた。それは、この間からお守り代わりにしている、大事なものの。

その感触で、私は自分が何をしにここへ来たのかを思い出した。

「谷崎くん！」

心の中の弱気に追いつかれないように、急いで声をかける。

谷崎くんは一瞬驚いた顔をしてこちらを向いた。昨日話しかけてきたやつだと思い出したのだろう、すぐにうんざりしたような表情になった。

「何。しつこいな、あんたも」

悲しいくらいに予想通りの反応。しかし、少しは耐性がついたみたいだ。昨日は谷崎くんの冷たい言葉に正直半泣きだったけれど。

本当にしつこくてごめん、とあやまりたい気分になったのをぐっところえる。あやまっている間に谷崎くんがいなくなってしまいそうだったから。私はすぐさま本題に入ることにした。

「あの、私、いつもこれを持ち歩いているの」

ポケットの中のお守りを、私はそつと取り出した。

お守り——それは谷崎くんの写真が掲載された新聞記事の切り抜きだ。正確には切り抜きのコピーで、オリジナルは痛まないようにしっかりと家で保存してあったりする。

「それ……」

はじめて、谷崎くんの否定的ではない言葉を聞いた気がする。

「うん、そう。新聞に載った谷崎くんの写真」

私は谷崎くんにもよく見えるように、切り抜きを掲げた。

「この写真を見るとね、なんだか温かい気持ちになって、それから元氣が出てくるんだ。だから、その……谷崎くんに、ありがとうって、ずっと言いたかったの」

やっと、伝えられた。話が急に飛んでしまったような気はするけれど、とりあえず、言いたいことは言えた。

しかし、言葉は一方通行だったらしい。谷崎くんは瞳をそらし、うつむいたまま何も言わなかった。唇に苦いものを含んだような表情を浮かべて。

居たたまれない沈黙のまま、長い時が過ぎたように感じた。私はスカートのプリーツを無意味に直しながら、次に言うべき言葉は何だろうかと考えていた。

その時、耳を澄まさなければ聞き逃してしまいそうな、小さな声が聞こえた。

「ばかばかしい。そんなことして、何になるんだ。写真なんてみんな、ただのニセモノじゃないか」

「ニセモノでも、いいんだよ。だって、私がこの写真に心動かされたのは本当だから。私にとっては、とても大事なものなんだよ」

私は谷崎くんの言葉に驚きつつ、必死で答えた。谷崎くんは、もう写真を撮ることが嫌いになってしまったのだろうか？ もしそうだとしても、私の心に灯してくれたあたたかな光を、否定することなんてできない。

谷崎くんはもう私の話を聞いてはいなかった。彼は素早く身を翻し、扉のほうへ歩いて行く。私は小走りで追いかけた。

「ま、待つて」

「ついてくんな」

「でも……」

私の鈍足では差が広がるばかりだ。谷崎くんはすでに階段を降り

ようとしていた。

あわてて後に続こうとした私は、足元をろくに見ていなかった。踊り場の壁に立てかけてあった角材を蹴ってしまったらしい。あっと思う間もなく、数本の角材が私のほうに倒れてくる。

「ばか、よける！」

谷崎くんの声が意外と近くで聞こえる。思わず目をつむってしまった私は、そのあとの光景を見ることはできなかった。

第5話 あわてる私と冷静なきみ

息を止めたまま倒れてくる角材を待ちつける。本当はそんなものを待っていたくはなかったけれど、体が固まったまま、どうしても動けなかった。

そのとき、強い力で腕を引っ張られた。そのまま前のめりになって転びそうだったけれど、腕はしっかりと支えられている。次の瞬間、角材が階段の手すりにでも当たったのか、甲高い音が聞こえてきた。

そして、静寂。おそろおそろ目を開けると、茶色い砂ばかりが舞う中、黒い学生服に包まれた背中があった。

「谷崎くん！」

もう行ってしまったとばかり思っていた。急いで階段をかけ上がつて来てくれたのか、肩で息をしている。

「くそ、何だよここ。整理しなすぎだろ」

谷崎くんは呼吸を落ち着かせると私の腕から手を離し、独り言のようにぼやいた。

かばってくれたんだ。驚きのあまり停止していた思考が働きだし、ようやく状況がわかってきた。

「あ、あの、ありが……とう」

まだ心臓がドキドキとうるさく鳴っている。私はやっとのことで、お礼の言葉を伝えた。

「……………」

やっぱり、谷崎くんの返事はない。いつもの素っ気ない態度だ。だけど、わざわざ戻ってきて、私を助けてくれた。

返事をする代わりに、谷崎くんは大きく腕を回して体をほぐしていた。左腕の次は、右腕を回す……と、彼の動きが急に止まった。谷崎くんは、しばらく右手を確かめるように触っていたけれど、やがて何事もなかったように手をポケットに入れようとする。

なんだか、おかしい。私はあわてて彼の手を取り、ポケットに入るのを阻止した。

「な……」

「手を見せて」

谷崎くんの抵抗するような声は聞かなかったことにして、私は彼の制服の袖をそつとめくり上げた。

「あ……」

思わず声が漏れた。谷崎くんの右手首には大きな擦り傷ができていた。かなり出血していて、シャツの袖口が赤く染まっている。

さっき私を助けてくれたとき、けがをしてしまったんだ。大変だ。

「は、は、早く保健室行かなきゃ」

私は動揺を隠すこともできない声で、谷崎くんのけがをしていないほうの手を引っ張った。

しかし谷崎くんは私のパニック状態などどこ吹く風といった態度で、

「いいって、めんどくせえ」

などと言っている。

「だ、だめだよ！　すぐに傷を消毒しないと大変だし痛くなっちゃうし、大体、こんな状態の手をポケットに入れようとするなんてもっと痛くなるからだめ！」

谷崎くんはうるさそうに目を細め、横で騒いでいる私を見た。怖い。でも、この手を離すもんか。

気合いが通じたのか、私の手を振りほどこうとしていた谷崎くんの力が、ふっと抜けた。

「なんで……」

「え？」

「なんでそんな必死なんだよ……」

ぼつりと、谷崎くんがつぶやいた。私がいかにしつこいので、あきれてしまったのだろうか。

「わかったよ。行けば、いいんだろ。保健室」

投げやりにいいつも、谷崎くんは先立って歩き出した。

「あ、うん。ありがとう！」

「……変なやつ」

あれ？ 私、何か変なことを言っただろうか。よくわからない。

けれど、谷崎くんの『近寄るなオーラ』が少し、やわらいだ気がして、嬉しくなった。

第6話 保健室でまったりタイム

「真純ちゃん、あのさ……そんなに泣きそうな顔されると、やりにくいんだけど」

先生は言いにくそうに、私のほうを見て苦笑いをした。

屋上での出来事のあと、すぐに保健室で谷崎くんのけがの手当てをしてもらっていた。先生が手際よく谷崎くんの傷を消毒する様子を、横で見えていたのだけれど……

「わ、私、そんな顔してた？」

「してたしてた。もう、真純ちゃんが怪我したんじゃないでしょ。そんな痛そうな顔して」

先生は呆れたように眉をハの字にして笑っている。しかし治療の手は止めないあたり、さすがプロだ。

手当てを受けている本人、谷崎くんを見ると、少しも表情を変えてはいなかった。あの恐怖の、消毒液が皮膚に触れる瞬間でさえ。すごすぎる。私なんて、横で見ているだけでも右手がヒリヒリするの。

「だって……」

谷崎くんがいてくれなかったら、私がそうになっていたのだ。いや、もっとひどいけがをしていた可能性が高い。

私はあらためて、谷崎くんに頭を下げた。

「谷崎くん、ごめんね。助けてくれて、本当にありがとう」

「……別に」

ひとこと言って、そっぽを向いてしまう谷崎くん。彼のことを知らなかったら、その態度に落ち込んでいたかもしれない。

けれど、今の私は谷崎くんのことを少しだけ知っている。こうして言葉で反応してくれたことが、じわりと私の心を温かくしてくれた。

そうこうしている間に谷崎くんの手には包帯が巻かれ、手当が終

わつたみたいだった。

「どう、包帯きつくない？　ちゃんと手、動かせる？」

先生の言葉を聞いて、谷崎くんは右手を数回動かしてみたあと、大丈夫だというようにうなずいた。

「先生、病院とか行かなくても大丈夫なの？」

不安に思ったので、先生に尋ねてみた。先生はにっこり笑って私の頭をなでると、明るい口調で答えてくれた。

「それは大丈夫だと思うわ。まあしばらくの間、ノートをとるのに不便かもしれないけどね」

「字は左で書くから」

谷崎くんがぼそりと言葉を挟む。谷崎くんは左利きだったのか。同じクラスになって間もないせいか、気づいていなかった。

思っていたより谷崎くんのけががひどくなくて安心したのか、私は口が軽くなっていた。

「そ、そつかあ、授業の時は困らないんだね。良かったあ……って、よくないよくない。痛いのにには変わらないのに」

言葉の途中で自分が不謹慎なことを言っていることに気づき、あわてて訂正する。『良かった』だなんて。自分が恥ずかしい。

「真純ちゃん、首ふり人形みたいで面白い」

私の胸中を知ってか知らずか、先生が楽しそうにツツコミを入れてくる。

谷崎くんのほうをちらりと見ると、彼は呆れたような視線で私を見ていた。そして、

「あんた、うるさいな」

サクツと一言。怒っている口調ではなかったけれど、やっぱり切れ味は鋭かった。落ち込むなあ。

道具を片づけていた先生がふと時計を見上げ、私たちに言った。

「あのさ、もう五時間目始まつてるけど、どうする？」

そう言えば、ここに来る時もやけに廊下が静かだった。よく先生に見つからなかったものだ。

「今日つて5時間目で終わりなんでしょ。よかったらここでお茶でも飲んで行きなさいよ。担任にはうまいこと言っというてあげるからさ」

それは魅力的な提案だった。……学校の先生として、その発言はいいのかなと不安にも思っただけだ。

さぼって帰るにも、結局、鞆を取りに教室に行かなければいけないし。というわけであと一時間、保健室で過ごすことになった。

先生と谷崎くんと私。途中で体調を崩した生徒が来ることもなく、三人でおしゃべりをして過ごした。もちろん、谷崎くんはほとんど話さなかったけれど、私が入れたお茶を飲んでくれた。先生にうれしい紅茶の入れ方を教わっておいで良かった。

先生が『テストのヤマの張りかた』を熱弁しても、谷崎くんは興味なさそうにしていた。そのくせ先生が質問したときには、言葉は少なくともきちんと言っている。聞いていなさそうで、実はきちんと話を聞いている谷崎くんを見て、私は頬がゆるむのを止められなかった。

窓ごしに、四月の太陽が私たちを暖めていた。

お茶を飲み終わり、鼻歌を歌いながらカップを洗っていると、先生が小さな声で私にささやいた。

「あの子でしょ。話をしたかった子って」

「えっ！」

思わずカップを取り落としそうになってしまった。先生が軽く私をにらむ。

「ちよつとー、そのカップ、結構高かったんだからね？ 気をつけてよねー」

「だ、だっていきなりそんなこと言うからっ」

反論しつつも、何が『そんなこと』なのか自分でもよくわからない。そのわからないことを先生に見透かされているような気がして、なんだか恥ずかしくなった。

「よかったわね。話せて」

「うーん……」

確かに、少しは言葉を交わしたけれど、きちんと話せているのかどうか自信がない。私がやったことと言えば、谷崎くんに余計なことを言って無視されて、保健室に無理矢理連れてきたことくらいな気がする。

それって、どうなんだろう……と頭を抱えそうになる私に、
「ふふ、がんばりなさいよね」

先生はひらひらと手を振って、カップを棚に戻しに行った。

……がんばるって、何をだろう？

第7話 意外なきみの顔

楽しい時間は過ぎるのが早いと、しみじみ思う。5時間目終了のチャイムが鳴り、ホームルームも終わったのだろっ、廊下に騒がしさに戻ってきた。

同時に、無言で谷崎くんが立ち上がった。

「教室に鞆取りに行くの？」

彼は尋ねた私に軽くうなずく。そして、先生のほうへ向かって頭を下げた。

「お世話になりました」

「うん、またなんかあったら気軽に来てよね」

私も鞆を取りにいかない。二人が話している間に座っていた丸椅子を元の場所に片づけ、谷崎くんの後に続いた。

彼の右手が、ふと目に入る。巻かれたばかりの包帯はやけに白く見えた。

「あの、谷崎くん、帰るとき鞆持とつか？ 手、痛いでしょう」

けがをしてしまった原因は私にある。私は少しでも谷崎くんの役に立つことがしたかった。

「は？ いいよ、別に。そこまでするほどのけがじゃない」

びつくりしたような声で言う谷崎くん。余計なことだったかな、と反省していると、後ろから間延びした先生の声が聞こえた。

「帰るのはいいけど、真純ちゃん、その恰好で？」

言われていることの意味がよくわからなかった。その恰好って、なんだろう？

「スカートの後ろ、思いつきり破れてるわよ」

「！」

急いでスカートを手で触って確かめてみる。ちょうどおしりのところが、縦に大きく破れていた。踊り場で雑多な道具の中をぐぐり抜けているうちに、ひっかけていたのだろうか。いつ破れたのか、

全く記憶になかった。

私、こんな恰好ですつと過ごしていたの？

体中の血液がすべて顔に集まったような気がした。頭のとっぺんから湯気が出ているかもしれない。

「な、な、な、な、なんで、もつと早く言ってくれなかったの？」

恥ずかしさのあまり、悪くはない先生に食ってかかってしまう。

「いや、ごめん。あたしも今気付いたところでさ。角度によってはわからないよ、それ」

「じゃ、角度によつては危険だつてことですか！」

「ああ、そういう言い方もあるわね」

「先生……」

後ろ姿を鏡で確認するのはやめておくことにした。きつと、見ないほうがいいこともあるのだ。

情けなさをごまかすように、私はぐちぐちと文句をこぼした。

「ああ、もう、制服のスカートつて結構生地が厚いの、こんなザツクリ破れちゃうもんなんだ。帰ったらお母さんに怒られちゃうよ。なんか変だと思ったんだよね。後ろの風通しがいいような気がしてたんだ……」

そこまでばやいたとき、私の後ろから奇妙な音がした。喉を詰まらせたときのような……。

何の音だろうと振り返ると、谷崎くんが必死に何かをこらえるように、口元を押さえていた。小刻みに肩を震わせてさえいる。

「た、谷崎くん？」

不安になつておそろおそろ呼んでみた。すると、まるでそれが合図だともいうように、谷崎くんは豪快に吹き出した。

「あ、あんた、おかしいだろ。か、風通し、つて……」

そこまでおかしいことを言つたつもりはなかったのだけれど、何かがツボに入ってしまったらしい。顔を赤くして息も絶えだえといった様子で、谷崎くんは笑い続けている。

え？ 笑っている、って、あの谷崎くんが！ 今日の衝撃的事件

と銘打ってランク付けするならば、踊り場のハプニングを押さええて一位に入ること間違いなしだ。

笑われているのが私、ということは少し釈然としなかったけれど、それはこの際置いておくことにしよう。私もなんとなく笑っている仲間に入りたくて、へへ、と中途半端にニヤけていた。

「あれあれ、谷崎くんは意外に笑い上戸だったのかな？」

言いつつ先生は、私のほうに何かを差し出していた。これは、カーディガン？

「これ上から羽織って帰るといいよ。丈が長いから、後ろも十分かくれるでしょ」

「ありがとう、先生」

私は感謝して、カーディガンを受け取った。

ひとしきり笑っていた谷崎くんを見ると、今はもう落ち着いているようだ。さつきは何があんなにおかしかったんだろう、と悩んでいるような、気まずい顔をしている。顔の怖さが三割増した。そんな姿をみて、今度は私のほうが吹き出しそうになってしまった。

第8話 空を見るきみ

今日は谷崎くんについて、たくさん知ることができた。

左利きであること。笑い出すと止まらないこと。そして、私の家の近くに住んでいること。

谷崎くんの家はうちと同じ町内にあり、意外とご近所だった。知らないうちにすれ違っていたことがあるかもしれない。

放課後、学校を出た私たちは、同じ方向に帰るために自然と連れ立って歩いていた。

夕方にはまだ早い、のんびりとした空気の住宅街。心が浮き立ち足が軽くなるような、春の風が吹いていた。

歩きはじめてしばらくの間、言葉を交わすことはなかったけれど、不思議とその沈黙が心地よいと思えた。

でも、谷崎くんはどうだろう？ 私はこっそりと隣の谷崎くんをうかがった。顔を見るには頭一つ分視線を上げなければならない。

谷崎くんは右手に違和感を感じるのか、時々思い出したように手を動かしてみていた。

「何」

こちららと見ているのがばれてしまったらしい。谷崎くんは鋭い視線を私に向けた。私は反射的に勢いよく首を振り、言いわけを始めた。

「うつん、その、ごめん、つい谷崎くんの右手が気になっちゃって

……」

「あんたのほうこそ、なんともないのかよ」

「えっ？」

「ケガ、してないのか」

「う、うつん、全然！ 谷崎くんが助けてくれたから。それより、学校で何か不便なことがあったら、なんでも言ってね。私、手伝うから」

言ってから、また余計なことだったかもしれない、と思わず口を押さえた。

「あんたさ」

谷崎くんの表情がより硬くなった。私はこれから何を言われるのだろうと身構える。

「俺に話しかけたって、もう他の写真は出てこないぞ」

「え、どういうこと？」

写真、という単語がいきなり出てきたことに驚いて、私は間の抜けた口調で聞き返してしまった。

「あんたはあの写真が良くて、俺に話しかけてきたんだろ。……なら、もう用はないじゃねえか」

俺はもう、写真は撮らないから。

そんなセリフが、続いて聞こえてきたような気がした。確かに、屋上では写真を撮らないと聞いてとても驚いた。けれど今はそれとは関係なく、谷崎くん自身と知り合っているのだ。

「用がないなんてこと、ないよ。私は谷崎くんと話してて、楽しいもん」

「は？ ウソつけ、俺と話してて楽しいはずないだろ」

私の意見は谷崎くんに即、否定された。素直な気持ちを口に出したのに、全く信用されていない。

「いやいや、さっきの笑い転げている谷崎くんは、かなり楽しかったよ」

言いながら私は、顔を赤くして笑っていた谷崎くんの姿を思い浮かべる。うん、本当に楽しい。

谷崎くんは一瞬目を見開き、次にはふい、と横を向いてしまった。その横顔は耳まで朱に染まっている。これは、照れているのだろうか。また新しい谷崎くんを発見してしまった。

「あ、あれは、あんたが面白い格好してたからだろ」

赤い顔のまま、谷崎くんは反論してきた。面白い格好と言われると、途端に恥ずかしさがよみがえる。何せ今も、スカートに大穴を

開けたまま歩いているのだ。

「え、もしかして、スカートの中、見た？」

「んなつ……ばか！ 見てねえよ、そんなもん」

「私のおしりを『そんなもん』って言うのはちよっと、ひどいと思う……」

谷崎くんの言葉を受けて言ったことだったけれど、なぜかこれも彼のツボにはまってしまったらしい。谷崎くんは再び肩を震わせ、懸命に自分の中の笑いと戦っていた。どうやら今回も負けてしまったようだ。

そんな谷崎くんを見て、私は少しだけ安心した。先ほどの話の流れだと、『もう近寄るな』と言われそうだったから。でも少なくとも私は、これから谷崎くんと話をしたいと思っていた。

一瞬、あたりが暗くなった。

私たちは自然と空を見上げる。太陽にじやれるように雲が寄り添って、光を遮っていた。

しばらく眺めていると、雲は太陽と遊ぶのに飽きたのか、ゆっくりと遠ざかっていく。雲の隙間から太陽が少しずつ姿を見せ、幾筋もの光を投げかけていた。

「きれいだね……」

私は思わずつぶやいた。そしてしばらくしてから気づく。谷崎くんの写真も空を映していた。もしかして、空の話をしてほしくなかったかもしれない。

「——そうだな」

自分の言葉に後悔しかかっていたとき、隣から声が聞こえてきた。ハツとして彼をみる。谷崎くんは、おだやかな表情で空を見つめていた。

廊下でも屋上でも、谷崎くんは空を眺めていたような気がする。もともと空が好きなかもしれない。私はほっとして再び空に目を移した。

空を見てきれいだと思う。そんな素直な気持ちを谷崎くんと共有

できたことが、とても嬉しかった。

第9話 きみにおはよう

「もう、昨日は急にいなくなるんだもん。心配したんだよ」

朝、校門前で会ったリオは、私の肩に両手をのせて長いため息をついた。

何も言わず午後の授業を休んでしまったのだから、心配するのも無理はない。私はリオに謝り、事情を説明した。私が谷崎くんを探しに行ったことや、谷崎くんの写真の話は少し言いにくかったので、偶然彼と屋上で出会ったことにしておいた。

「へえ、谷崎って子、いいところあるんだね」

「うん。おかげで無事だったんだよ……スカートは、残念なことになっちゃったけど」

スカート事件はリオにも受けが良かった。笑っちゃいけないけど、と前置きをしつつも、リオは遠慮なく大笑いをしていた。そのスカートはお店で直してもらっている。今はいているのは予備のスカートだ。

「あれ、真純、それって体操服？ 体育の授業出るの？」

笑い終わったリオは、私の肩で揺れているサブバッグを見て、目を丸くした。

「うん、今日は頑張ってみるつもり」

「でも、百メートル走って聞いたよ。やっぱり心配だなあ」

「ずっと走ってるってわけじゃないし、大丈夫だって！」

私はリオを安心させようと、力を込めて言った。

もしかすると、ポケットの写真（のコピー）が効いているのかもしれない。自分でも驚くほど、体も気分も軽く感じられる。このままどこまでも走れそうな気さえしていた。

部室に寄っていくからと言うリオと途中で別れ、私は自分のクラ

スへと向かう。

教室に入る前、ふと谷崎くんが頭に浮かんだ。空を見ていたときの谷崎くんの表情は、とても優しくかった。もう一度、あんな顔が見たいな……そう思いながら戸を開ける。

と、そこには本物の谷崎くんがいた。今日は遅刻組ではなかったのだ。

同じクラスなのだから教室にいて当たり前なのに、彼を見た瞬間、胸が大きく跳ねたのはどうしてだろう？ 私は少しぎこちない動きのまま周りの人にあいさつをし、自分の席にたどりついた。

そして、谷崎くんのほうをもう一度見る。やっぱり窓際で、空を眺めていた。昨日の帰りのときと同じだ。

けれど、昨日のようなおだやかな表情はなかった。雲ひとつない空を見ているのに、谷崎くんの表情は曇ったままだ。初めて声をかけたときのように、眉を寄せて、何か考え込んでいるように見える。私は鞆を置くと、谷崎くんのもとに向かった。もう声をかけるのにためらうことはなかった。

「おはよう、谷崎くん」

谷崎くんはゆっくり私のほうに振り向く。そのあと少し遅れて、

「……ああ、おはよう」

あいさつを返してくれた。しかも、怒った顔ではない。それだけで私は谷崎くんに感謝したい気持ちになった。昨日の朝は無視されてしまっただけに、嬉しい。苦節二日、とうとう谷崎くんと話せるようになったのだ。

苦節二日って、苦節と言えるほど長くはないな。自分の考えにツコミを入れながら、私は話し始めた。

「昨日の空とは全然違うね。雲を全部ほうきで掃いちゃったみたい」「そうだな」

「桜の花が咲いてたら、青空に似合うと思うんだけど。さすがに散ってるねえ」

窓の外には桜の木が数本植えられている。まるで校舎を見守って

いるみたいに見えた。今は花がなく、緑の葉っぱが我先にと空へ向かって伸びている。

「桜なら、咲いてるところあるけど。校内に」

谷崎くんは外に目を向けたままだったけれど、話を聞いてくれていたみたいだ。小さな声で返事が返ってきた。

「え、本当？」

その話を詳しく聞こうと思ったところで、チャイムが鳴った。同時に担任の先生が教室に入ってくる。

「後で桜の話、聞かせてね」

私は谷崎くんに手を振って、急いで席に着いた。

第10話 空と走る

洗いたての体操服を広げて勢いよくかぶる。柔軟剤のいい匂いがして、心地いい。久しぶりの感触だった。

体育の授業前の更衣室は、騒がしい女子の声であふれていた。男子がいないせいか、いつもよりも遠慮のない話題を披露しあっている。

谷崎くんとの話は、しばらくおあずけになってしまった。休み時間に話しかけようと思ったけれど、谷崎くんは日直の仕事で忙しくしていて、桜のことを聞く機会がなかった。残念だけれど、仕方がない。お昼休みを待つことにしよう。それにしても、谷崎くんが大真面目に日直の仕事をしている姿は、ちょっぴりおかしかった。もう一人の日直の子に手を出させないくらい、気合いが入っていたから。

授業はリオの言っていた通り、百メートル走だった。出席番号順に二人ずつタイムを計る。準備体操もしっかりすませて、あとは自分の番を待つのみだった。

「嫌だなあ、私、足遅いんだよね」

「タイムなんて計りたくないよ」

隣で並んでいる子たちの憂鬱そうな声に、私も半分同意してうなづく。しばらく走っていないから、とんでもなく遅いだろうと思う。それでも、残りの半分はわくわくした気持で占められている。みんなとこうして愚痴を言い合うのさえ、楽しいと感じていた。

「次、原田さん、布野さん」

名前が呼ばれた。小走りでスタートラインに向かう。後がつかえているせいか、あまり待つこともなく合図のホイッスルを聞いた。心の準備ができていなかった私は、ワンテンポ遅れて飛び出した。すでに布野さんとはかなりの距離があいてしまっている。必死でついて行こうとしても、足が上手く前に進まない。

けれど、息を胸いっぱい吸い込むと、青空が体中にしみこんでくるように思えて、とても気持ち良かった。私はもう何も気にすることなく、自分のペースで足を動かし続けた。

走り終えたあと座って息を整えている私に、リオが言葉をかけてくれた。

「真純、やったじゃん！ 走れて、良かったね」

「うん、気持ち良かったよ。空と一つになったみたいだった」

「えー、なにそれ、かつこよすぎ」

「足が遅くても、言うことだけは立派ですとも」

私たちは、顔を見合せて笑った。笑い声は高く、高く、空に吸い込まれていくようだった。

そのとき、私はすっかり浮かれてしまっていた。自分の体調の変化に全く気づいていなかったのだ。

全員のタイムを計り終わり、先生が私たちに集合するよう号令をかけたときのことだ。

「先生呼んでるね、行かなきゃ」

「うん、そうだね」

私もリオに続いて立ち上がろうとしたとき、急に目の前が真っ白になった。足もとが地震のように揺れている。頭がきりきりと痛んだ。

しまった、貧血だ。そう思ったときにはもう立っていられなくなり、私はその場にしゃがみ込んでしまった。

「真純！」

「どうしたの？ 原田さん」

リオや先生、みんなが駆け寄ってきてくれている。私はみんなに心配ない、大丈夫と言いたかったけれど、息を吸うだけで頭に響いてしまい、思うように声が出せなかった。

「原田さん、あなた、三学期に入院してたんですって？」

私を保健室に連れてきてくれた野口先生——体育の先生——は、私の具合が落ち着いたことを確認すると、口を開いた。

「あ、はい。でも、一週間だけだったから。それに、ただの貧血だからもう大丈夫です」

それは本当だった。貧血の治療のため少しだけ入院していたけれど、大きな病気をしているわけではなかった。

「うーん……でも、体育はしばらくお休みしたほうがいいんじゃないかしら」

「……」

「しっかり休んで体調を整えて、それから運動しても遅くないですよ？」

「……はい」

私はうなずいた。また貧血を起こして先生やみんなに迷惑をかけてしまうのは嫌だったから。心の中には、体育に出たいと首を振る自分もいたのだけれど、あえて見ないようにしていた。

「じゃあ、お大事にね」

「はい、あの、ありがとうございます」

先生は私の肩をポンポンと叩き、授業に戻って行った。

私はベッドの上掛けを思いきりぎゅっとつかんだ。そうしないと、自分が情けなくてしょうがない気持ちがあふれ出てしまいそうだったから。

「真純ちゃん、あんまり気にしないのよ」

保健の田村先生が顔をのぞかせる。

「今日は頑張ったのねえ。百メートルなんて、なつかしいな」

先生はいつもの軽い調子で、私を元気づけようとしてくれた。それはとても嬉しかったけれど、逆にすらくも感じられた。

私は少し休んだあと、着替えに行くからと先生に伝え、ゆっくりと上履きをはいた。

何となく、一人になりたい気分だった。

第11話 温かい手

保健室を出た私は、すぐ着替えには行かず、ふらふらと歩きまわっていた。まだ少し頭が痛むけれど、もうほとんど良くなっている。ちょうどお昼休みに入ったので、しばらくは教室に帰らなくてもよさそうだ。本当なら早く帰って、リオやクラスのみんなに元気な顔を見せたほうがいいと思ったけれど、どうしても気が乗らなかった。

リオには自信満々に「大丈夫」なんて言っておきながら、結局また保健室のお世話になってしまったからだ。自分が情けなくて恥ずかしくて、どんな顔で教室に帰ればいいのかわからなかった。

一人になれるところを考えて、すぐに思いついたのはやはり屋上だった。けれどあの踊り場を抜けるのはさすがに危険だ。今度は何が倒れてくるかわからない。だから少し妥協して、屋上の手前の階段で腰を落着けることにした。

ほこりっぱい階段に座ってぼんやりしていると、体操着の膝に水滴が落ちてきて、丸いしみがいくつもできた。少し遅れて自分が泣いているのだと気づいたとき、こみあげてくる嗚咽を抑えられなくなってしまうた。

間の悪いことに、そのとき近くで足音がした。私はあわてて涙と声を引っこめようと思ったけれど、うまくいかない。雑に手の甲で涙をぬぐっている最中に聞こえてきたのは、知っている人の声だった。

「原田？」

名前を呼ばれたのは初めてだったので、びっくりした。私の名前を知らないかもしれないと思っていたから。不思議そうな顔でゆくり階段を昇ってくるのは、谷崎くんだった。

「どうか、したのか？」

「う……うつん。な、なんでも、ない……」

谷崎くんの問いかけに、私はぶんぶんと首を大きく振った。しゃくりあげながら言っても全然説得力がないな、と思いながら。

「……そうか」

けれど、谷崎くんは私の言い分を否定することはなかった。そのかわり、黙って階段をもう数段上がり、私の隣に腰かけた。

私はもう一度びっくりした。谷崎くんのほうから近づいてきてくれるなんて、本当に意外なことだった。

不思議なことに、谷崎くんが隣にいてくれると、とても安心できる気がした。抑えようとしていた涙が再びあふれ出てきて、私は、肩を震わせて泣きじゃくった。

谷崎くんは、私が泣いている間、何も言わずそばにいてくれた。

それから、何分経っただろう。頬の涙も乾き、気持ちが悪く落ち着いたところ、谷崎くんがつぶやいた。

「桜……」

「えっ？」

「桜、見に行くか？」

私はホームルーム前の、谷崎くんとの会話を思い出した。

「桜って、谷崎くんが朝言ってた、学校で咲いてる桜のこと？」

「そうだ」

谷崎くんはうなずいた。

「行く。行きたい」

私は青空の中に舞っているピンクの花びらを思い浮かべ、すぐに返事をした。

「じゃあ」

「わっ」

谷崎くんは立ち上がると、私の手を引いた。そのまま立たせてくれる。その動きが素早すぎて、一瞬何がどうなったのかわからなかった。

「び、びつくりした」

「おあいこだ。あんただって、俺の手、かなり強引に引っ張ってた
だろ」

「お、おあいこ？」

その言葉は、谷崎くんが口に出すには妙にかわいらしい気がして、
私は思わず聞き返してしまう。

「なんだよ」

私の言葉に含むものを感じたのか、谷崎くんは唇を尖らせた。私
は笑わずにはいらなかった。

歩き始めてから、まだ手をつないでいることに気づき、私はうろ
たえた。手だけじゃなくて、顔も熱い気がする。

「た、谷崎くんって、手があつたかいんだね」

あわてるあまり、おかしいことを言ってしまったかもしれない。

「あんたは、冷たい手だな」

「う、うん。おかげであたたまったけど」

谷崎くんはそこで何かに気づいたように立ち止まり、すごい勢い
で振り向いた。そして、つないでいる手を確認すると、やっぱりす
ごい勢いで手を離れた。

そっぽを向いてしまった谷崎くんは何やら口元でもごもごつぶ
やいている。悪い、とかそういうことを言っているように聞こえた。
谷崎くんも、私を上回るうるたえぶりだった。

「じゃあ、まあ……行くか」

「うん」

少し落ち着きを取り戻した私たちは、また歩き出した。

もう手はつないでいなかったけれど、谷崎くんの手の温かさがず
っと、残っている気がした。

第12話 きみと桜の下で

その角を曲がる前に、向こうで桜の花が咲いていることに気づいていた。

花びらが私たちのところに飛んできて、存在を教えてくれていたから。まるで呼ばれるように、私と谷崎くんは桜の木のもとへ向かった。

期待に胸を高鳴らせて、足を進める。踏むのをためらうくらい、足もとにはピンク色の花びらがふんわりと積もっていた。

「すごい、桜が降ってる」

目的地にたどりついた私は、感嘆の声を上げた。そこは体育館の裏側で、ほとんど人の出入りがない場所だった。桜の木は、誰にも邪魔されることなく花びらを散らし続けている。

「ここも、もう終わりだな」

少し遅れて、隣に谷崎くんが並んだ。

「おとといならまだ、散ってなかったけど」

「でも、まだこんなに咲いてるよ。私、この場所に桜が咲いてることに知らなかった。谷崎くん、連れてきてくれてありがとう」

嬉しい気持ちを全部、谷崎くんに伝えたかった。私は谷崎くんの顔をしっかりと見て、お礼を言った。

「……ああ」

短く言うと、谷崎くんは視線をそらしてしまった。困ったような顔をしている。照れているのかな。

彼のそんな顔を見ると、なんだか胸の奥がくすぐったいような気がして、私も困ってしまう。困ることなんて一つもないのに、おかしい。

ほてった顔を冷ますように、私は黙って桜を見上げていた。花びらの散る音が聞こえそうな静けさの中、谷崎くんが口を開いた。

「傷ついてる人は、より風景に感動するらしいな」

「そうなの？」

「テレビの受け売りだけど」

「へえ、そっかあ……」

傷ついていると言えば大げさだけど、私もへこんでいたからよくわかる。確かにそうかもしれない。

私が谷崎くんの写真を初めて見た時は、胸にしみて痛いような気がした。そのあともずっと、心のどこかで夕焼けが赤く燃えている気がする。

ふと、隣の谷崎くんを見る。彼の手に視線を落とすと、右手の包帯が見えた。

「傷ついてるで思い出した。谷崎くん、今日の体育、右手大丈夫だった？」

うんざりしたような顔がこちらを向いた。やばい、また余計なことを言ってしまったみたいだ。

「あんたな……ホント心配症だよな」

「だって、走ったりすると、その、傷に響くんじゃないかと……」

私はしどろもどろになってしまう。

「まあ、いいけど」

息を吐いた谷崎くんは、花びらの舞う空を見上げながら、あまり抑揚のない声で言った。

「このくらいで、痛いなんて言えない。もっと苦しんでたやつをそばで見てたから。そいつの痛みに比べたら、俺のけがなんてたいしたことない」

谷崎くんは、隠されている何かを探しているかのように、空をじっと見つめていた。いつもよりたくさん話してくれるのは嬉しかったけれど、言葉の中に悲しいものが混じっているのが気にかかった。

『そいつの痛み』と、谷崎くんは言った。

もしかして、谷崎くんが時々悲しそうな顔をしているのは、その人のことを考えているからだろうか。

聞くことはできない。谷崎くんの心に土足で上がりこむことのよ

うに思えたから。けれど……

頭の中に、ぺたりと張り紙をされた気がした。その紙には、谷崎くんについて気になることが書かれていて、けっしてはがれない。しかも上からどんどん張り足されて、枚数が増えていくばかりだった。

第13話 花びらふわり

いろいろなことに思いをめぐらせているのは、谷崎くんも同じだろうか。私たちの間に、再び静けさが横たわっていた。

しばらくすると、少し疲れてきたように感じた。気がつけばずっと立ちっぱなしだ。体育のときみたいにへたり込んで、谷崎くんに迷惑をかけるわけにはいかない。

そう思っ、私はできるだけ不自然に見えないように、そばにあったベンチに座った。普段使われていなさそうな、さびの匂いのするベンチだったけれど、今は桜の花びらできれいに飾られていた。谷崎くんはベンチの後ろに立って、背もたれに手を置いた。

腰を下ろすと、疲れはすぐどこかに行ってしまったようだ。よかった。私は胸をなでおろした。

何とはなしに、落ちてくる花びらを受けるように手を伸ばしてみる。てっきり逃げてしまうと思っていた花びらは、曲線を描きながら、狙いを定めたように私の手のひらに着地した。

「わ、ちょうど手に落ちてきた」

声を上げてしまっ、こんなことで騒ぐなんて子供っぽいかもしれない、と少し恥ずかしくなっ。

けれど谷崎くんは気にしていないよう、私の手の中の花びらをのぞきこんでいる。

「俺、さっき口の中に入った」

「えっ、花びらが？」

花びら採集に関しては、私よりも谷崎くんが上級者だったようだ。ピンポイントで口の中に入るとは、あなどれない。

「どうだった？ おいしかった？」

「いや、すぐ出したし。味はよくわからなかった、けど」

私の質問に答えながら、谷崎くんは口元に手をやった。肩の震えがどんどん大きくなる。これは、もしかして……

予想通り、くつと喉を鳴らし、谷崎くんは吹き出した。また、笑いの波がきてしまったの？

「なんで一番に味を気にするんだよ」

谷崎くんは、苦しそうな声でツツコミを入れた。箸が転んでもおかしい年ごろという言葉を聞いたことがあるけれど、男の子にもあてはまるんだろうか。不思議だ。私のほうがおかしいことばかり言っているから、という可能性はできれば否定したいところだった。

「だって、桜餅とかあるじゃない。あれは花びらじゃないけど」

言いわけをしても、谷崎くんは笑い声を抑えるのに必死で、少しも聞いていない。私は少しムツとして、さらに反撃をした。

「なによ。そんなに笑ってたら、腹筋がものすごく鍛えられちゃうよ。そしたら谷崎くんは『お笑い番組で腹筋を六つに割った男』なんて言われるんだからね。そんなのカッコ悪いでしょ」

「や、やめてくれ。話をとんでもないところに飛ばさないでくれ」

どうやら反撃は逆効果みたいだった。谷崎くんは体をくの字に曲げて笑い転げている。

「桜餅って言ったらお腹すいてきちゃったな」

谷崎くんのこととはもう放っておくことにしよう。私はあきらめ気味に、独りつぶやいた。

「メシ、食ってないのか」

まさかひとり言に返事がくるとは思わなかったもので、一瞬ドキリとした。谷崎くんは何とか笑いの発作から抜け出たようで、今は普通の声に戻っている。

「うん、忘れちゃった。今そのこと思い出した」

「忘れてたって……体に悪いだろ、それじゃ」

谷崎くんの鋭い言葉が、ぐさりと胸に突き刺さった。彼の言う通りだ。貧血を起こして体育に出られないと泣くくせに、ご飯も食べずにいるなんて。健康になりたいなら食事が基本なのに、我ながら矛盾している。

「売店なら、まだパンくらい残ってるんじゃないか」

「え？」

「早くしろよ。昼休み、終わっちまうぞ」

返事をする前に、谷崎くんはさっさと歩き出していた。私はあわてて彼のあとを追う。

もしかして、売店までついてきてくれるのだろうか。

「あ、でも、お金持ってないや」

「貸してやるよ、そんなくらい」

「ありがとう……」

今日の谷崎くんは、なんだか優しい。初めて会ったときはあまりに違う彼に、私は少し戸惑った。どうしたんだろう。

もしかして、こっちの優しい谷崎くんが本当の姿なのかもしれない。写真のことを除けば、普段は優しく、よく笑う人なのかもしれない。

私は、最後にもう一度振り返って桜の木を見た。ここを離れるのが少し名残惜しい。桜は私たちがいてもいなくても、変わらず青空の下でやわらかな花を咲かせている。

谷崎くんと似ている、と私は思った。普段は誰も知らないけれど、温かな気持ちが見えにくいところに隠されている。

てのひらを見ると、さっき受け止めた花びらがまだそこにあつた。私は花びらをそっとポケットに入れてから、谷崎くんの背中を追いかけた。

第14話 謎、かすかな音

お昼のピークを過ぎた売店は人がまばらで、食べるものを求めてやってくる生徒はほとんどいなかった。幸いなことにパンはまだ売れ残っていて、選ぶのに悩むほどだ。

「遠慮するなよ」

一番安そうなパンを手にとろうとする私に、谷崎くんはこう言うてくれた。

「ありがとう。お金、後で返すからね」

私は返事をして、バランスよく栄養が摂れそうなポテトサラダパ
ンとトマトジュースを選んだ。

買い物を済ませたあと、谷崎くんとは私は、売店の隣の休憩スペースに移動した。

今度は、意外にも話はずんだ。谷崎くんが私のトマトジュースを見て「よく飲めるな」といったことがきっかけで、好きな飲み物、嫌いな飲み物についていろいろ話した。

谷崎くんは、コーヒーを飲むならブラック派だということも聞いた。今も黒いと言えるくらい濃いコーヒーを涼しい顔で飲んでいる。すごい、大人だ。ちなみに私はミルクたっぷり、砂糖は三杯入れないとコーヒーは飲めない。そのかわりトマトジュースを飲むのは得意だと自慢してもいいかな。

話している途中、谷崎くんの表情が突然、強張った気がした。

彼の視線は窓の外に向けられている。何を見ているのだろうかとも私も続いて窓の外を見る。

窓から見えるのは中庭だ。緑の多い場所で、生徒たちが思い思いに休憩している。特に目立っているのは数人で集まっている男子生徒と、一人の先生だった。

先生には見覚えがある。屋上で谷崎くんと話していた、生物の永野先生だ。男子生徒に何かを説明しているらしい。男子生徒たちは

うなずきながら、それぞれ手に持ったカメラの操作を試しているようだった。

カメラ。写真部の活動かもしれない。屋上での会話を思いだしてみると、永野先生は写真部の顧問だという風に受け取れた。

谷崎くんにとっては、あまり見たくない場面なのかもしれないかった。

どうしよう。私は何も言うことができず、かと言って普通にしていることもできず、ただ息をひそめるばかりだった。

机で、かすかに何かが当たる音がする。音の源を探すと、机に置かれた谷崎くんの指先が、机をひつかくように叩いていた。しばらく見ていると、その動きはまるで、シャッターを押すようなくさに思えてきた。

「あれじゃ、だめだ。脇をしめないとぶれる」

音の合間に、谷崎くんのつぶやく小さな声が聞こえる。気をつけていないと聞き取れない、本当に小さな声だった。

私は思わず、顔を上げて谷崎くんの顔を見た。私の視線に気づくと、谷崎くんは気まずそうに眼を伏せた。

「谷崎くん、あの……」

「行こう」

谷崎くんは私の言葉をさえぎり、素早く席を立つ。

「うん、そうだね」

私もうなずいてあとに続く。もう一度窓の外を見ると、こちらを向いている永野先生の姿が見えた。谷崎くんがここにいたことに気づいたかもしれない。

谷崎くんは、写真が嫌いになったのではないのだ。私はそう確信した。さっき見せたしぐさと言葉は、カメラを触りたくてしようがない人のものだった。

それなら、なぜ写真をやめると言ったのだろう？ 谷崎くんと途中で別れ、更衣室で着替えている最中も、私の頭の中は疑問でいっぱいだった。

撮りたくても撮れない、事情があるのだろうか。

けれど、谷崎くんに撮りたい気持ちがあるのなら、このままカメラを持たずにいるのはつらいだけだと思う。私に、なにかできることはないのかな。

こんなことを考えていると知られたら、谷崎くんに余計なお世話だ、と一刀両断されてしまいそうだ。言葉と同時に、彼のあの冷たい目つきさえ浮かんでしまう。

それでも、私は谷崎くんと写真のことを考えずにはいられなかった。

第15話　ともだち

「あの……ごめんね。びつくりさせちゃって」

やっと着替えを終えて教室に帰った私は、クラスの女の子たちにあいさつをした。

「もういいの？　原田さん」

「無理したらだめだよ」

みんなは次々と声をかけてくれる。

「原田さん、一年の文化祭のときも倒れちゃって、しばらく学校休んでたよね？　だから大丈夫かなって心配してたんだ」

去年同じクラスだった宮本さんも、私のところにきてくれた。

「うん、今日は大丈夫だよ。心配してくれて、ありがとう」

文化祭。あのときも情けない思い出がある。

せっかくみんなで頑張って喫茶店を準備したのに、本番で私はなにもできなかった。さあ文化祭開幕、というそのときに気分を悪くして、早退することになってしまったのだ。

そう言えば、あのあとに谷崎くんの写真と出会ったんだっけ。

「文化祭のときはごめんね。私、肝心な時に役に立たなくて」

「やだ、そんな原田さんのせいじゃないよ。気にするな」

宮本さんと話していると、少し離れたところからリオがこちらを見ているような気がした。

そうだ、リオにもあやまらなきゃ。私は急いでリオのそばへ行っ

た。

「リオ、せっかく心配してくれてたのに、結局へこたれちゃってごめん」

リオは怒っているのか、横を向いてしまった。そして早口で私に問いかけた。

「お昼は。ご飯は食べたの？」

「う、うん。パン食べた」

「……なら、いいけど。ホントにもう、心配ばかりかけてくれちゃってさ」

「ごめん」

怒ったときのリオは、本当に怖い。私はびくびくしながら報告を再開した。

「それで、体育はしばらく休んだら、って野口先生にも言われちゃった」

ここではじめて、リオは私の方を向いた。

「えっ、そうなの」

「でも私、楽しかったから。久しぶりに体動かすの、すごく楽しかったから。だからちゃんと元気になって、もう一回体育の授業受けたい」

「そっか……」

リオは考え込むようにしばらく目を伏せた。それから私の頭に手を置いて、髪をくしゃくしゃとかき混ぜた。

「リ、リオ？」

「無理すんのはだめだけどさ、軽い運動ならつきあってもいいよ。卓球とかさ。素人の私らがやる分には、そんなに激しい運動じゃないし。できそうなことからやってけばいいんじゃない？」

「……」

私は、言葉にならずに、リオに抱きついた。

「ちよっと、なによ真純」

リオがくすぐったそうな声を上げて身をよじったけれど、離してなんかあげない。そのくらい嬉しかった。私のことを真剣に考えてくれるリオの気持ちが伝わってきて、胸の熱さがおさまらなかった。

「うわ、原田さん大胆だねえ」

「なにこのラブラブな空気」

周りの人たちに、なにかあやしい噂をされていたけれど、まあ、気にしないでおこう。

放課後、財布を持って谷崎くんのところへ向かう。谷崎くんは口ッカーから荷物を取りだしているところだった。

私から彼に話しかけるのは、実はとても緊張した。

「谷崎くん、これ、今日のお昼代」

なんとか普通に話しかけることに成功したとき、私は大きな仕事をやりとげたような気分になった。

「ああ。どうも」

だから、変わりなく接してくれる谷崎くんを見てホッとした。写真部の活動を見たことで、気分が落ち込んでるのではないかと思っていたけれど、大丈夫みたいだ。

「助かつちゃったよ。ありがとう。おかげで授業中におなか鳴らずに済んだよ」

「あんたなら、腹が鳴っても、澄ましてそうだな」

おどけたように谷崎くんが言う。そんな口調で話すのを聞くと、仲良くなれた気がしてはしゃいでしまいそうになる。もちろん、この言葉のあと本当にはしゃいでいたら変に思われるだろうから、我慢して普通に應對しておく。

「そんなことないよ。すごく恥ずかしがるに決まってるじゃない」

「どうだかな。花びら食おうとしたやつだから」

「食おうとなんてしてないよ！ 味聞いただけなのに、ひどいなあ」
「だからそれが……」

私たちの軽口がのってきたところで、廊下から谷崎くんを呼ぶ声が聞こえた。

「谷崎。ちょっといいか」

声の主は永野先生だった。先生は軽く手を振って、こちらに歩いてくる。

谷崎くんの顔つきが一瞬で変わる。初めて会った時のように、固く唇を結び、何も受け入れようとはしない顔だった。

第16話 きみについて考える

永野先生はふくらんだ茶封筒を谷崎くんにとつと差しだした。けれど、谷崎くんは窓枠に手をかけたまま動かない。

「これ、お前が撮った写真。ずっと渡したかったんだ。今まで預かってたけど」

「もう、いいませんから。処分しておいてください」

先生の話は谷崎くんに鋭くさえぎられてしまう。途中で終わってしまった言葉が、宙に浮いたまま私たちの間をただよっている気がした。

「そうは言ってもなあ。こんないいものを処分なんて……」
「いいません」

谷崎くんは先生の手を払いのけた。そのとき、先生の持っていた袋が手からはじかれ、開いた窓のほうへと飛んでいく。

このままでは窓の外に落ちてしまう。私は必死に手を伸ばして、手前の机の上で袋を押さえた。しかし、勢いで袋から飛び出した写真が数枚、窓の外へと落下していつてしまった。

私は窓から身を乗り出し、落ちた場所を確認する。写真は中庭の池に入ろうとしているところだった。このままでは濡れてしまう、と思ったそのとき、谷崎くんの声がした。

「……すみませんでした」

意識が教室の中に引き戻された。谷崎くんは先生への謝りの言葉を口にする、私たちの間をすり抜け、教室を出て行ってしまった。

「谷崎くん!」

呼びかけても答えが返ってくることはなかった。私は途方に暮れてしまつて、ため息をつく以外、なにもできない。

教室に残っていた他の人たちは、気まずい空気を感じ取ったのか、それぞれ足早に帰っていく。静かになった教室で、先生と私はしばらく立ちつくしていた。

止まった空気を動かすように、先生は腰をかがめて、足元に落ちていた写真を拾った。私があわてて押さえたときに、床に落としてしまっていたらしい。その写真は、ビルの谷間からのぞく青空を写していた。

「嫌われたもんだなあ……」

青空の写真を見つめ、永野先生はつぶやいた。

「先生のことが嫌いっていう感じじゃないような気がします」

「フォローをありがとう、原田」

私の言葉に、先生は笑って答えてくれた。フォローのつもりはなかったたので、少し心苦しい。本当に思ったことを言っただけだったから。

たとえば先生ではなくても、写真について話す人のすべてを、谷崎くんは避けようとするのではないだろうか。

考えている私の横で、先生は谷崎くんが出て行った方向に顔を向けた。

「駄目だったか。さっき見た時は、ずいぶん雰囲気やわらかくなっただと思っただけ。それは原田の前でだけなのかねえ」

「え？　そ、そんなことはないと思います、けど」

なぜか動揺した私は、かなり調子はずれの声を出してしまった。

「やっぱり、まだ時間があるのかな」

しみみりと、先生は言った。私は言葉の意味がわからなくて、先生の言葉を頭の中でリピートした。時間がある？

「ああ、悪い悪い、一人考え込んでやって。それじゃ、先生はもう行くから。原田も気にしないで、気をつけて帰れよ」

「あ、先生、私、この写真預かっててもいいですか」

「ああ、お願いするつもりだったよ。頼むな」

先生は職員会議に遅刻しそうだったらしく、急いで教室を出た。一人になった私は窓際へ行き、混乱した頭を窓ガラスに押し当て、何から考えていいのかよくわからない。息を吐くとガラスが曇って、もやがかかった。窓のもやは手で消しとれるけれど、頭の中のもや

はどう消したらいいのだろう。

谷崎くんの鞆はまだ教室に残されたままだ。このまま彼を待つて
いようか。

けれど私は、あることを思い出した。先に行きたいところがあつ
たのだ。

第17話 夕焼け空に溶けていく

靴と靴下を脱ぎ、裸足になった私は、さあやるぞと心の中で士気を高めた。

決心をして、そつと足を水につける。池の水は太陽の光で暖められていたらしく、冷たくはなかった。私はお世辞にもスマートとは言えない足取りで、池の中央へと進んだ。

今来ている場所は、さつき写真が落ちていった池だ。石を積んできたこの池は、浅い割に結構広かった。そのため、岸から手を伸ばして写真を取ることはできない。

だから、こうして池の中に入ることにしたのだけれど。

「ぬるぬるしてるなあ……」

思わず独り言が出てしまう。足を動かすたびに感じる感触に、早くも私の決心はくじけそうだった。これは、藻とかそういうものだろうか。正直、気持のよいものではない。

部活で学校に残っている人たちの、「あの子は何をしてるんだろう?」という感じの視線も突き刺さる。今、この瞬間だけ透明人間になりたいと思ってしまう。

我慢して進むと、水はさつきより深く、膝より少し下くらいになった。だいぶ歩きにくくなったけれど、ここで負けてはいられない。目の前にはもう、水に浮かんでいる二枚の写真が見えているのだ。あともうちよつと。

かがんで水面にある写真を拾う。やっと、手にすることができた。すっかり水に浸かってしまったけれど、乾かせば元に戻るかもしれない。

写真をよく見ると、風景を撮ったものではなかった。ひとりの女の子が写っている。小学校の一、二年生くらいだろうか。カメラを構えている谷崎くんのが本当に好きなのだとわかる、素敵な笑顔をこちらに向けていた。妹さんかな?

もう一枚も近くに浮いていたので、回収する。良かった。これでは中庭に落ちていた分と合わせて、全部拾えたはずだ。私は靴を置いた場所にそろそろと戻る。

「わわっ」

最後の最後で気を抜いてしまった。芝生に上がろうとした私は、足がかりにした石で滑ってしまった。あわてて前かがみになり、大きな石につかまって事なきを得る。一瞬どうなるかと思った。私にも反射神経らしきものがあつたんだな、と少しだけ自分を見直す。

芝生に上がっても足がまだ濡れていたので、中庭のベンチで足を乾かすことにした。しばらく座っていると、誰かの影が足元で揺れるのが見えた。

「なにやってんだ」

見上げると、谷崎くんがいた。私の様子を怪訝そうに見ている。

「わざわざ池に入ったのか」

「うん……ええと、写真が落ちてたから」

「こんなもの、どうして拾うんだ。放っておけばいいだろ」

目を細めて私をにらんでいる。怖いほうの谷崎くんだ。私は身をすくめながら、答える言葉を探す。

「だ、だって、そのままだとかわいそうな気がしたから」

「……………」

谷崎くんはその言葉には答えず、私がついている写真に目をとめた。濡れた足と一緒に乾かしていた、女の子の写真だ。

「それ……！」

そう言うが早いか、谷崎くんはあつという間に私の手から奪い取ってしまった。あまりに素早い行動だったので、私は驚くこともできず、ただ呆然としていた。

谷崎くんは奪った写真を見ようとはせず、ただぎゅっと握って立っていた。その手がかすかに震えている。うつむいた顔を前髪が隠していて、表情がよくわからない。

「谷崎くん……あの」

「残りの写真は、捨てるなり何なり好きにしてくれ」

言葉が私のもとに届く前に、谷崎くんは足早に歩いていつてしまった。

私はしばらく動けずに、ぼんやりと谷崎くんの背中を目で追っていた。

「なによ。あんな言い方しなくてもいいのに」

文句を言ったものの、やっぱり私が余計なことをしたのかも、とすぐ弱気になってしまう。

「好きにして、って言ったよね、この写真。それなら、ものすごく大事にしてやるんだから。私の部屋にいっぱい飾っちゃうんだから」

言いながら、袋から写真を取り出す。触れた手に温度を感じるような、たくさんの風景写真だった。やっぱり、谷崎くんの写真は素敵だ。だけど……

人物の写真はなかった。谷崎くんが持ち去ったあの一枚だけみただ。あの女の子、妹さんではないのかな。谷崎くんはどうして、あの写真だけ持っていたんだろう。

ふと思っポケットの切り抜きを出してみた。夕焼けの写真記事。そこに写っている後姿の女の子と、さっきの笑顔の女の子は同じ人なのかもしれない。

そんな仮説を立ててみたところで、肝心なことは少しもわからなかった。

「なんで、そんなに一人で抱え込んでいるのかなあ」

つぶやいた言葉は夕焼け空の向こうに溶けて、消えてしまった。

第18話 きみの青色

谷崎くんがいない。

学校には来ているはずなのに。朝、昇降口で確かに彼の姿を見たのに。

池で写真を拾った次の朝、私は谷崎くんとあいさつをしようと、教室で待っていた。昨日の今日では話をしてくれないかもしれないけれど、せめておはようと言いたかった。

それなのに、三時間目が始まるうとしているこのときになっても、谷崎くんは教室に現れない。そう言えば朝見かけたときは、教室とは違う方向に行っていた気がする。

とうとう、四時間目の終わりを告げるチャイムが鳴った。クラスの人たちに谷崎くんのことを聞いてみたけれど、学校に来ていることさえ知らないようだった。

どこを探そう。私はとりあえず教室を出た。

「真純、なに急いでんの？」

リオがパンと牛乳を持って、こちらに歩いてきていた。売店に行ってきたのだろう。相変わらず行動が早い。

「あのね、谷崎くん、見なかった？」

「あー、なんか、見たかも。学校休んでると思ったらいるんだもん。びつくりしたよ」

「どこで？」

「特別教室のあたりだったかなあ。図書室とか、あの辺の方向に行ってた」

「ありがとう、リオ」

「え、ちよつと、真純？」

お礼をいいながら、私の足はもう動きだしていた。

私は一番先に、図書室を探すことにした。

図書室は、お昼ご飯を終えた生徒たちがおしゃべりをする場所になっていた。どうやら本来の目的とは違う使われ方をしているみたいだ。

そこで同じクラスの女の子を見つけたので、谷崎くんのことを聞いてみることにした。

「え、ううん。知らない」

「あたしも」

期待していた答えは返ってこなかった。私がお礼を言って立ち去ろうとしたとき、彼女たちは話題を振ってきた。

「ねえねえ、原田さんてさ、最近マジで谷崎くんと仲良くない？」

「ええ？」

またつかまってしまった。こういう話題は、かわしかたがわからない。どうやってごまかそうかと悩んでいると、話は意外な方向に進んでいた。

「谷崎くんよかったよね。あんなことがあったけど、明るくなったんじゃない？」

「あんなこと？」

「原田さん知らなかったつけ。谷崎くんの妹さん、亡くなったんだって」

「ほら、あの写真に写ってた子。だから今みたいにとっつきにくくなったって聞いたよ」

「え……？」

全く知らなかった言葉。冷たい水をかけられたような気がして、私は動けなくなった。

妹さん？

亡くなった？

周りのざわめきがやけにうるさく聞こえる中、誰かがこちらに視線を向けているのを感じた。振り向くと、長い前髪からのぞく鋭い瞳がこちらを見ていた。谷崎くんが、立っていた。

「谷崎くん……」

隣の女の子たちは、ハツとして口をつぐむ。

「興味本位でどうこう言われるのは、もううんざりなんだよ」

谷崎くんの声は静かだった。けれど、彼のまなざしは怒りに満ちていた。

「ち、違う、そんなんじゃない……」

私が話し始めると、谷崎くんは聞きたくないと言わんばかりに後ろを振り返った。そして瞬く間に走り去ってしまった。

「待って！」

谷崎くんを追いかけなくては。私は続いて走り出す。

「原田さん」

図書室を出ようとしたとき、クラスの女の子たちが私を呼びとめた。

「その……ごめんね」

「ううん」

私は少し笑って首を横に振ると、前を向き、図書室を飛び出した。すぐに息が上がって苦しくなったけれど、今は止まってはいけない気がする。谷崎くんを一人にしてはいけない気がする。私は自分なりに全速力で走り続けた。

すでに谷崎くんの後ろ姿は見えなくなっていた。一瞬迷ったあと、私はいちかばちかである場所に向かうことにした。

屋上だ。

第19話 屋上は今日も青空

屋上へ向かう階段を駆け上がる。いつも人の気配のないこの場所では、私の呼吸の音さえも辺りに響きわたっていた。

踊り場を注意して通り過ぎ、重い扉を開ける。

やっぱり谷崎くんは、そこにいた。屋上の手すりにもたれた後ろ姿は、風景の一部になってしまったように見える。このままだと、彼が空に溶けて消えてしまうのではないかと不安になる。私はそつと声をかけた。

「谷崎くん」

谷崎くんは振り向かなかった。

「……来たのか」

「うん、来た」

私は呼吸を整えながら、谷崎くんの隣に立つ。

「私、あやまりたくて。谷崎くんに、ひどいことしたから。ごめんなさい」

風が吹いて、谷崎くんの前髪をなびかせる。けれど横顔は動かないまま、空に向いていた。私は、谷崎くんの表情を必死に読み取るうとしていた。

「でも、私、興味本位なんかじゃなかった。本当に、そんなつもりじゃなかったんだよ」

言いわけみたいだと自分でも思った。けれど、他に自分の気持ちはどう伝えたらいいか、私にはわからない。

「そうだな」

「えっ？」

思いもかけない谷崎くんのおだやかな声が聞こえ、私は驚いた。

「あんたは、そういうやつじゃない。話してて、なんとなくわかる。ただ、俺が知られたくなかっただけかもしれない。あの写真に写ってた妹が、もういないってことを」

「あの写真の女の子が……」
もう、いない。

さつきは夢の中にいるみたいにその話を聞いていたけれど、だんだんと胸の痛みが増していく。谷崎くんは、今までどんな気持ちで毎日を過ごしていたんだろう。

「……」

私は続けてしゃべろうとする。けれど息が苦しくて言葉が出にくい。そう言えば階段を駆け上がったんだっけ。今は、今は貧血になっている場合じゃないのに。

「原田？ 顔が真っ青だぞ」

気がつくと、谷崎くんがこちらを向いていた。頭を下げ、目線を合わせて私の顔をのぞきこんでいる。谷崎くんに心配をかけたくはない。

「大丈夫……夫。すぐ治るから。しばらくこうしてたら……」

私は手すりをぎゅっと握って、体を支える。めまいは少し待っていれば治るはずだ。

「大丈夫に見えねえよ」

谷崎くんは私に背中を向けて手を差し出した。

「ほら、早くおぶされ。保健室行かないと」

「で、でも。そんなの悪い……」

「いいから！」

谷崎くんは私の腕を引いた。自分を支えられずふらついた私を、谷崎くんはあつという間に背負う。谷崎くんが立ち上がり、一瞬で視界が変わった。谷崎くんは私を背負い直し、扉のほうへ歩き出した。

「ごめん。ごめんね……」

しゃくりあげているせいで、言葉はたぶん谷崎くんが届いていないだろう。

谷崎くんの力になりたくて、ここに来たのに。これじゃ迷惑をかけてるだけだ。自分のことが嫌いになりそうだった。

私は、こぼれてくる涙を何度もぬぐった。谷崎くんの制服を濡らしたくはなかったから。

まぶたを開くと、見慣れた天井が見えた。保健室だ。

あれ、私、いつの間に眠っていたんだろう。ここに来るまでのことは覚えていたけれど、そのあとが思い出せない。まだ頭がぼうつとしているみたいだ。視線を横に向けると、ベッドの横には谷崎くんが座っていた。

そうだ、私、谷崎くんに背負ってもらってここに来たんだ。

谷崎くんは深くうつむいている。何か考えごとをしているようだった。

「谷崎くん、ごめんなさい。私……」

もつと近くで谷崎くんの顔を見たくて、私は身を起こそうとした。途端に視界が揺れて、気持ちが悪くなってしまう。谷崎くんは素早く私のそばに来て、背中を支えてくれた。

「いいから、急に起きるな」

「うん……ありがとう」

もう一度枕に頭をおろすと、揺れはおさまった。もう、楽に呼吸ができる。

「あの、もしかして五時間目始まっちゃった？」

私は、気になっていたことを谷崎くんに聞いてみた。

「今は六時間目が終わったところだ」

「そんなに長い間、付き添ってくれたの」

二時間も寝ていたなんて。そんなに長く谷崎くんをつきあわせてしまったんだ。

私の表情を察してか、谷崎くんは薄く笑ってこう言った。

「どうせ、俺はもともとサボってたし。気にするな」

「でも……」

そのとき、ベッドを仕切っているカーテンのすき間から、保健の

田村先生がひよっこり顔を出した。

「真純ちゃん、目が覚めたのね」

「先生……」

「具合はどう？ 寒くない？」

「えっと、はい、大丈夫」

「うん、ちよつとよくなつたみたいね」

先生は私の顔をのぞきこんで、笑顔を見せた。

「じゃあ先生は真純ちゃんのお家に連絡してくるから、もうちよつと休んでなさいね」

「お母さんに電話しちゃうんですか」

「しちゃうんです。今回は、病院に連れていってもらったほうが良さそうだし」

「やだなあ……」

また痛い注射をされてしまっただろうか。憂鬱だな。

「まあ念のためね。じゃあ行ってくる。谷崎くん、真純ちゃんのこと看ててあげてね」

「はい」

先生は手を振りつつ、保健室の外へ出かけていった。先生に場所を譲るため立っていた谷崎くんは、再びベッド横の椅子に腰をおろした。

第20話 きみは笑顔で

保健室のドアが閉まる音がしたあと、谷崎くんは口を開いた。

「松原が心配してた」

「リオが？」

「原田の鞆持つてきてた。用があってもう帰ったけど、ずっとここに居たそうだった」

「そうなんだ……」

明日、リオにお礼を言わないと。そしてたつぷり怒られよう。

「先生にちよつと話聞いた。昨日も、調子悪かったんだな」

「うん……でも、谷崎くんと会ったときはもう、良くなってたから」「ごめん。俺、知らなくて。無理させて悪かった」

谷崎くんが頭を下げる。私は、たまらない気持ちになった。それはそのまま言葉になって、口からあふれだした。

「どうしてあやまるの。谷崎くんは悪くないのに。私が勝手にこうなっただけなのに。谷崎くんにいやな思いさせたのに。迷惑かけたのに」

言っているうちにまた涙がこぼれてきて、両手で顔をおおった。

泣いてばかりの自分が、ばかみたいに思えた。

谷崎くんはそんな私を見て、なぜか優しい顔になった。

「原田はつらいことがあったとき、ちゃんと、泣いてるんだな」

ちゃんと、泣いてる？

どういう意味だろう。私は答えを探すように、谷崎くんの顔を見た。

「俺は、だめだった。泣かなかった。妹が、死んだときも」

私は息を吸い込んで、一瞬止まってしまった。

「交通事故だった。耐えられないくらい痛い思いをして、報われな
いまま死んでいった」

静かな声で谷崎くんは話す。しかしその言葉は、私の胸のふちに

がつんとぶつかって音を立てていた。

『もつと苦しんでたやつをそばで見てたから。そいつの痛み比べたら、俺のけがなんてたいしたことない』

あれは、妹さんのことを言っていたんだ。

のどの奥が痛い。気を抜くと泣き声が漏れてしまいそうだった。

谷崎くんは表情をなくした顔で、淡々と話し続けている。

「コンクールで賞をとったのは妹が死んだあとだったから、少しも嬉しくなかった。妹がもう印画紙の中にしかないことがわかっただけだった。カメラを触つてると、妹のことばかり思い出して何もできなくなる。自分でもどうにもできないんだ」

谷崎くんの顔に窓の影がさす。影は、どんどん色濃くなっていた。

「だから、妹のことと写真を一緒にして、頭の中に出てこないようにした。そうすれば食べることも寝ることも、普通にできたから」

忘れなければ、普通にいられたかった。そんな果てのない悲しい気持ちで、谷崎くんの中にあったのだ。

「私、谷崎くんにひどいことを言ってたんだね。写真のことを忘れるようにしてたのに、そのことを話して思い出させて。なんて謝ったらいいか」

私は、目をそらさないで谷崎くんを見つめた。私には、谷崎くんの本当の痛みがわかっていないかもしれない。けれど、せめてまっすぐ彼のほうを向いていたいと思った。

「いや、原田には感謝してる。ありがとう」

「え……？」

「俺が写真撮らなくても、原田は話したいって言うてくれた。嬉しかった。楽になれた気がした」

谷崎くんはそう言ったあと、少し笑った。

感謝だなんて。私にはふさわしくないように思えた。けれど、嬉しい。谷崎くんの言葉や笑顔は、パンに塗られたはちみつみたいに、じんわりと私の胸にしみ込んでいった。

第21話 手のひらで伝えて

私は目に残る涙をぬぐって、谷崎くんに笑いかけた。

「私こそ、ありがとって、いつも思ってた。文化祭のときは、私も泣かないようにしようって思ってたから」

「文化祭？」

「うん。去年、うちのクラスは喫茶店をやることになって、みんなで頑張って用意してたんだ。でもよりによって文化祭当日に私はへたりこんじゃって。すごく楽しみにしてたから、ショックでもう、何にも考えたなくなっちゃってた」

「俺と同じだな」

「……私のは、そんなに大したことじゃないんだけどね。で、思いだすと泣きなくなるから、頭空っぽにして歩いて、そのとき谷崎くんのしゃ……」

写真、と言いかけて、谷崎くんの顔を見た。私はまた、谷崎くんのことを傷つけているのだろうか。

「ああ。それで？」

けれど谷崎くんは、落ち着いた声で話の続きをうながした。

「う、うん、それで、谷崎くんの夕焼けの写真を見たら、知らない間に涙が出た。きれいだって理由で泣いたの、初めてだった。代わりにつらかった気持ちも思い出したけど、こんなに感動できるんなら、それでもいいやって思ったの」

話していて、自分でも何を言いたいかよくわからなくなってしまう。それでも、ただ自分の感じたことそのままを谷崎くんに伝えたくて、私は懸命に話した。

「それでも、いいのか」

谷崎くんの表情が揺れる。どこか戸惑うような、無防備な顔をしていた。

「つらくてもよかったのか」

私に向けられた言葉ではないようだった。谷崎くんは自分に問いかけるように、小さな声でささやいた。今まで忘れようとしていた気持ちを、懸命に自分の中から取り出しているように見える。痛そうな表情。けれど谷崎くんはその痛みに耐えるように、じっと考え続けていた。

「まだ、持つてるか？」

今度は私に向って谷崎くんが問いかけた。なぜか私は、質問の意味がわかった気がした。私はスカートのポケットからそれを取り出し、谷崎くんに渡す。

それは赤く燃える夕焼けの中で、楽しそうに遊ぶ女の子が写っている写真。新聞に載った谷崎くんの写真だった。

谷崎くんは、膝に落とした両手で写真の切り抜きを持つ。そして存在を確かめるように、紙の端を指でなぞっていた。

「久しぶりに、近くで見た」

谷崎くんは体を前に屈め、震える手で切り抜きを抱え込むように、額に寄せた。

「青子……」

消え入るような声。けれど、確かに聞こえた。

私は夢中で手を伸ばして、谷崎くんの手を取った。力を込めて握る。こうすれば少しは伝わるような気がした。私の中にストックしてある温かい気持ちを全部集めて、谷崎くんに伝えたかった。

手のひらに、握り返される感触を感じる。同時に、手の甲に冷たいものが落ちてきた。

谷崎くんの涙が、こぼれていた。

涙はあとからあとからあふれ出す。谷崎くんの肩が震えるたびに私もこらえきれずに、見た目かまわず一緒に泣いた。

泣いたぶんだけ、谷崎くんの悲しい気持ちが流れて、消えていけばいいのに。せめて悲しさが、谷崎くんが抱えられるくらい小さくなってくればいいのに。

涙でにじむ夕焼けの写真や、保健室の窓から見える青空、そして

私の手のひらも。

全てのものが谷崎くんを暖めてくれますように。
私はただ、そう願った。

第22話 青とともに

保健室で谷崎くんと一緒に泣いた日から三日間、私は学校を休んでしまった。

お見舞いに来てくれたリオは、予想通りたっぷりお説教をしてくれた。怖かったけど、真剣に怒ってくれる人がいるのはありがたいと思う。もう心配をかけないようにしなきゃ。

リオは帰る間際になって、「頼まれたから」と白い封筒を私に手渡した。

封筒を開くと、中には写真が入っていた。青空を背に花びらを散らす、一本の桜の木が写っている。この間谷崎くんと一緒に見た桜だろつか。写真と一緒に、桜の花びらも同封されていた。

『これでも食って元気出せ』

そんなメモ書きと一緒に。差出人は、一瞬でわかった。

「谷崎くんてば、まだそのネタ引張るの？」

私は、おかしくて笑った。笑っているはずだった。それなのに、涙が出てくるのはどうしてだろう？

谷崎くんが、自ら写真を撮ったかもしれないことにびっくりして、私のためにわざわざ写真を用意してくれたことが嬉しくて、それから花びらは食べないよ、と突っ込みを入れたくなり……、私の心は、いろんな気持ちであふれかえっていた。

元気になって久しぶりに登校した私は、谷崎くん写真のお礼を言いに行った。谷崎くんは今日も、教室の窓際で空を眺めている。

「悪い、あれ、ちょっとズルした」

谷崎くんは写真について、まずこんなコメントをした。

「ズルって、なあに？」

唐突にそんなことを言われて、私の頭の中はクエスチョンマークでいっぱいだ。

「あれ、携帯で撮ったんだ」

「携帯？ 携帯カメラであんなにきれいに撮れるものなの？」

「あのくらいなら、まあ……」

さらりと言う谷崎くん。あの写真、花びらがこちらに飛んでくるかと思つたくらい、鮮明に写っていたのに。やっぱり谷崎くんはすごいんだ。

私が口を開けて感心していると、谷崎くんははにかむように笑つた。

「その、情けないけど、カメラ持つと右手が震えるんだ」

「手が……」

「自分のカメラで撮れるようになるには、時間がかかりそうだ」

私は、谷崎くんの妹さん、青子ちゃんの写真を思い浮かべた。そんなに簡単に、平気な気持ちにはなれないだろう。

「面白い顔、してるな」

考えている私を、谷崎くんは意地悪そうな瞳でのぞきこんだ。

「面白いつてなによ」

「冗談だ。あんたはたぶん、俺の気持ちのこととか、そういうのをいろいろ考えてたんだろ。心配症だから」

「う……」

全くその通りで、私は返す言葉がない。

「俺なら、大丈夫だから。もう、しんどいことを忘れないって決めた。青子のことも」

谷崎くんのまなざしはまっすぐで、どこにも曇りがなかった。

きっと心配するようなことはないのだ、と私は思った。今、空を仰いでいる谷崎くんに、不安げなところはひとつもないように見える。彼は前よりももっと、自由に周りの風景を見ているように思えた。

「だから、ちゃんとした写真はしばらく待っててくれ」

「うん、私、待ってるよ。谷崎くんが撮りたい写真を撮れるまで」
私は、力強くうなずいてみせた。

「じゃあ、一番に撮るのは、原田がいいな」

「……え？」

一瞬で顔が熱くなる。私はなんで今、こんなにあせっているんだろう？

「あれ、俺、よく考えたら変なこと言った、か……？」

谷崎くんの顔も、赤い。

「へ、変じゃない、変じゃないよ。すごく、嬉しいよ。私も撮ってもらいたい。こんなのでよければだけど」

私は顔の前で思い切りよく両手を振った。しかし、次にはある疑問が浮かんできた。

「ああっ、でも、自分が写ってる写真を楽しみに待ってるって、ちよつと恥ずかしくない？」

「……ナルシストかな」

「もうっ、違うってば」

谷崎くんはポップコーンがはじけたみたいに、笑いだした。

二人でいると、どうしても顔が熱くなってしまうのかな。

きつと、ここ最近の陽気のせいだ。そうに違いない。私は無理矢理そう結論付けた。だって谷崎くんも同じように、暑そうにしているもの。

そんな私たちの間を、からかうように風が通り抜けていった。

第22話 青とともに（後書き）

ここまで読んでくださって本当にありがとうございました。
この話が、ほんの少しでも暇つぶしになれば幸いです。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9655e/>

君の青色

2010年12月26日12時10分発行